

vol.53-03 (通算 600号)

2023年6月号

やどかり

2023年6月15日発行
(毎月1回15日発行)1987年12月19日第三種郵便物認可
発行人 公益社団法人やどかりの里
代表者 増田 一世

〒337-0043 さいたま市見沼区中川 562

TEL 048-686-0494

FAX 048-747-7030

URL <https://www.yadokarinosato.org/>

定価 50円 (含会費)

平和・いのち・人権について考えよう

－ 沖縄の歴史，私宅監置の歴史に向き合い未来を切り拓くために－

5月3日憲法記念日に、各地で憲法集会が開催された。「平和」「いのち」「人権」を守るために、歴史を振り返り、憲法について考え、自分たちの考えを声にする機会でもある。今の私たちの暮らしは、戦争による多くの犠牲の歴史の上に創られたものだ。語り継がれる歴史はほんの一部にすぎず、まだまだ知らないこと、知るべきことがたくさんある。その1つに、「消された沖縄の障害者」の存在がある。映画「夜明け前のうた」は、沖縄で精神障害のある人たちが、隔離され、その存在をないものとされ続けてきたという事実を光をあて、制作された。その背景には、戦争が大きく影響している。

1952年4月28日、サンフランシスコ講和条約が発効され、日本が米国の占領下から独立を果たした。この日を政府は「主権回復の日」としている。しかし、沖縄や奄美群島などは米国統治下に留め置かれ、日本の独立と引き換えに切り捨てられた「屈辱の日」とされている。沖縄は日本国憲法の適用外であり、人権が蹂躪された状態で精神障害を抱える人たちの存在も地域社会の安定のために隠されていた。この事実を多くの人に知ってもらい、あらためて、平和やいのち、人権について考えてもらいたい、そんな映画である。

1950年に日本本土では禁止になった「私宅監置」が、沖縄では1972年まで行われていた。国家制度として精神障害者を小屋などに隔離し、狭く暗い建物の中で、人との関わりが絶たれ、医療とは無縁の中で過ごさざるを得なかった人たちの姿が映し出された。孤独と

絶望の中で何年もの時を過ごしたことを思うと、胸が張り裂けそうになる。やどかりの里が活動を開始したのは1970年。その時、沖縄ではまだ私宅監置が行われていたのだ。

4月27・28日の2日間にわたる上映会には、延べ600人を超える人が来場し、知られざる沖縄の歴史を知ることとなった。そして、私宅監置は、精神障害のある人だけでなく、知的障害、身体障害のある人も対象となっていたことも知った。「弱い者は排除する、一部の人を犠牲はやむを得ない」とする政策、地域に迷惑をかけないようにと隠そうとする家族の心理、こうした考えは決して過去のことではなく、今も根強くある問題だ。

この映画を製作した原監督は「犠牲になってもやむを得ない命はない。日本の中で何が起こったのかを知るべき。今尚居場所がなく孤立している精神障害者は大勢いる。それは私宅監置の過去と地続き。形を変えた私宅監置は至るところにある」と問題提起している。

映画の最後に1人1人の写真と名前が読み上げられる。この映画で監督が最も大切にしたことだ。消された障害者の存在を示すこと、隔離され、排除された気持ちはされた人にかかわらない。だからその暗闇を照らすことができるのは犠牲者たちなのだ。1人1人の写真から向けられる眼差しは、映画を観た多くの人たちに語りかける力があつた。

戦争が生み出した不幸、弱いものを排除する社会、そして貧しい精神医療、何重もの不幸を背負い続ける歴史はもう終わりにしなくてはならない。(大澤 美紀)